

千代田区における外部空間のニューノーマル

— 法政大学エコ地域デザイン研究センター —

目的 新型コロナ肺炎流行後、公共空間における滞在の様態には大きな変化が求められている。いままでは「多くの人が集うこと」が公共空間の価値判断基準の一つであったが、感染予防の観点から密な接触を回避することが必要で、ある程度の間断性を持ちながら緩やかに人が集うしくみや設えが求められている。特に昼間流入人口が大きい千代田区では、オフィスワーカーや観光来訪者の利用する外部公共空間を時間的・空間的にどう棲み分け分散的な利用を促すべきかを検討していく必要がある。本研究では現有する千代田区の外部公共空間（公園や街路など）を再検証し、公共空間利用のニューノーマル（新しい様態）を示すことで、新しい生活様式に対応した都市計画・都市政策の策定に資する資料の提供を行うことをめざす。

研究内容・結果 本事業では、法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻学生の協力のもとで以下の4点のワークショップをおこなった。

（1）千代田区全公園の全踏ワークショップ（2021年9月23～30日）

公園・緑地を訪問し、データシートを作成。手分けして全公園を踏破。

（2）公園の性能計測（2021年10月7～14日）

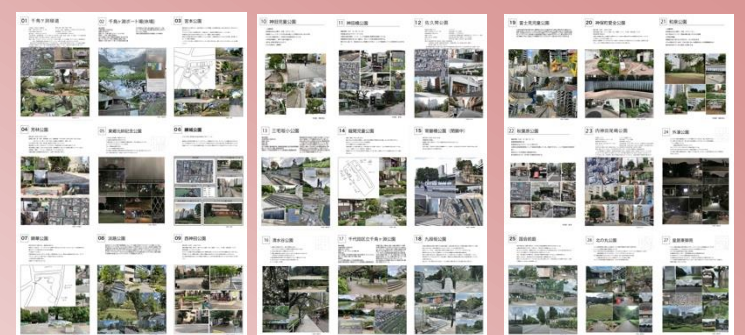
54公園を訪問し、設定した項目に関して性能計測を実施。

（3）地域特性による公園利用者の属性推定

公園の周辺半径150m圏内の建物の用途を分析し、特定要素の面積割合が全54公園の上位15%（8公園）を「利用者に特徴のある公園」として抽出した。

（4）利用形態による公園の評価（2021年10月14～21日）

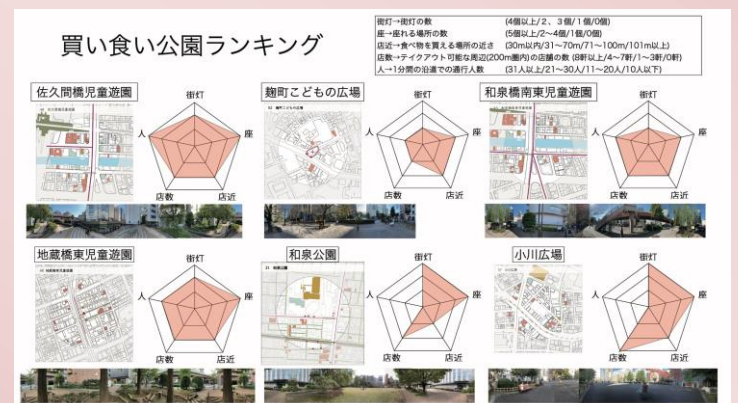
ポストコロナのニューノーマル社会における外部空間の新しい利用形態を見据え、それぞれのワークショップ参加者が新しい公園の利用形態を提案した。そのうえで、その利用形態において検討が必要と考えられる評価項目を先の性能計測より引用し、そのパラメータで公園を評価づけ（「千代田公園ミシユラ」）を行った。



千代田区全公園データシート（一部）



左：ワークショップ風景
右：公園利用者の属性推定



利用形態による公園の評価（例）

考察・まとめ 本事業ではニューノーマル社会における千代田区公園の可能性について検討した。公園の利用形態は、利用者属性すなわち周辺地域の利用者像によって異なると考えられる。しかし、本事業では検証したところ、現状の公園は周辺利用者像に対応した形態となっていないことがわかった。オフィス街、住宅街、学生街、飲食店街それぞれで、外部空間のニーズは異なるはずで、周辺地域との関係を見据えた公園整備が、ますます求められると考えられる。また、本事業ではワークショップの形式をとる形で対象54公園の性能測定を行い、これをパラメータに用いることで、それぞれが設定した新しい利用形態の使いやすさを評価した。評価を通して見えてきたのは、各公園が現有している特徴をより先鋭化、拡大化することで、全体としてより広範なニーズに対応できる外部空間が実現できる可能性である。千代田区の外部空間の持つポテンシャルが活かされ、ポストコロナ、ウィズコロナの時代において豊かな社会が形成されることを期待したい。